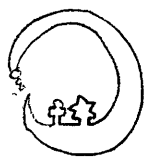




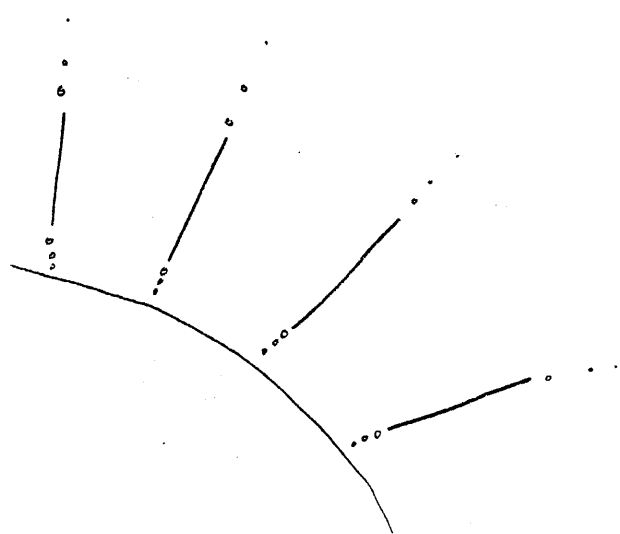
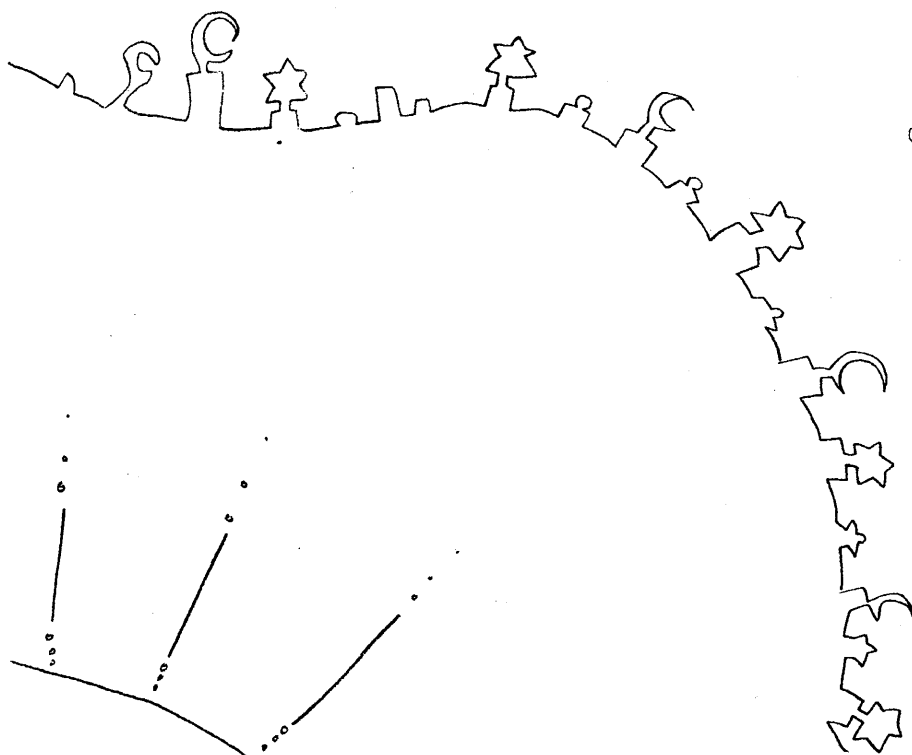
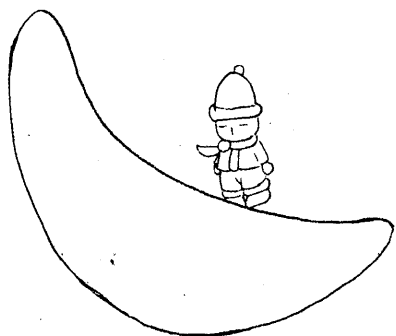
子どもの権利条約フォーラム2002 in ちば

『千葉発 Kid's Rights Wave』

～子どもと市民の参画で世界は変わる～



記録報告集



2002年12月7日(土)～8日(日)

千葉県教育会館ホール・会議室

☆☆☆ 目次 ☆☆☆

子どもの権利条約フォーラム2002 in ちば 開催趣旨	1
フォーラムの感想 子ども・若者からのメッセージ	2
1日目〈12月7日(土) 千葉県教育会館大ホール 13:00~19:00〉	
オープニングアトラクションーロックソーランー 他	5
堂本知事と若者の対談「おとなにばかり任せていいのか!？」	8
私たちが求める権利とは〜ペルーの子ども団体「ナソップ」を迎えて	11
子どもの表現大交流会《It's the Hyogen》	14
2日目〈12月8日(日) 千葉県教育会館会議室 9:30~15:00〉	
第1分科会 はじめの一步〜子ども社会参画に向けて〜	16
第2分科会 子どもの心を受け止めるアサーティブ・トレーニング	17
第3分科会 “あそぼ あそぼ” 子どもとおとながいっしょにあそぶワークショップ	18
第4分科会 子どもも市民! ティーンズで考える空間デザインワークショップ	20
第5分科会 こんな学校・あったらいいよね	22
第6分科会 小児科医・毛利子来さんと子育て・教育基本法を学ぶ ー子どもの権利実現と教育基本法ー	23
第7分科会 語り場	24
第8分科会 シンポジウムーOK! 不登校・ひきこもり	25
第9分科会 統合教育何でも相談室	28
第10分科会 大漁旗にチャレンジ つくろう My Flag!	29
第11分科会 チャイルドラインー千葉からの発信ー	31
第12分科会 わたしたちはここにいる〜武力紛争と子どもの権利 「世界の子どもと日本」分科会 A	32
第13分科会 ペルーの働く子どもたちと交流しよう「世界の子どもと日本」分科会 B	35
第14分科会 養護施設を知っていますか?〜知ろう考えよう恩寵園問題	36
第15分科会 子育て教育言いたい放題	38
第16分科会 シンポジウム・子どもの権利条例ができるとう変わるの? 「子どもの権利条約の具体化(公的第三者機関)の現状と課題について	39
第17分科会 言いたいこと言おう! やりたいこと描こう! ー子どもと元子どもでつくる紙芝居「これは子どもの権利!？」ー	41
閉会全体会	42
アンケートから 参加者の声	44
「フォーラムを終えて」 実行委員長 武智多恵子・奥地圭子・喜多明人	48
賛同者・賛同団体一覧	51

主 催
子どもの権利条約フォーラム2002 in ちば実行委員会

子どもの権利条約フォーラム2002 in ちば 趣 旨

子どもの権利条約フォーラムは1993年開催以来、以下の点を基本的な趣旨として掲げてきました。

- ① 日本における子どもの問題に取り組む人々と海外における子どもの問題に取り組む人々の現状報告及意見交換
- ② 子ども同士の交流、子どもの大人の意見交換
- ③ 条約のより実効性ある実施を進めるための国・自治体関係者との建設的対話
- ④ 条約をひとつの基準として日本と世界で子どもの権利水準の検証。「子どもの権利条約白書」の刊行
- ⑤ 条約の趣旨や規定の普及

後 援

千葉県・千葉県教育委員会・千葉市・千葉市教育委員会・我孫子市・我孫子市教育委員会・市川市・市原市・市原市教育委員会・印西市・浦安市・柏市・柏市教育委員会・鎌ヶ谷市・君津市・佐倉市・佐倉市教育委員会・白井市・袖ヶ浦市・東金市・成田市・成田市教育委員会・流山市・習志野市・野田市・野田市教育委員会・船橋市・松戸市・茂原市・八街市・八千代市・四街道市・四街道市教育委員会・近江八幡市・川西市・川西市教育委員会・川崎市・川崎市教育委員会・子ども的人権連・ユニセフ募金千葉事務局・千葉県弁護士会・千葉日報社・朝日新聞千葉支局・読売新聞千葉支局・毎日新聞千葉支局・東京新聞千葉支局・NHK千葉放送局・千葉テレビ放送

プ ロ グ ラ ム

12月7日(土) 13:00~19:30 教育会館大ホール 参加者500名

オープニングアトラクションーロックソーランー

堂本知事と若者の対話 「おとなにばかり任せていいのか!？」

ペルーの働く子どもたちは今ー私たちが求める権利とはー

子どもの表現大交流会《Its the Hyogen》

食事交流会 プラザ菜の花にて 参加者120名

12月8日(日) 分科会 9:30~15:00 教育会館会議室 参加者670名

第1分科会《はじめの一步~子どもの社会参画に向けて》	第13分科会《ペルーの働く子どもたちと交流しよう》
第2分科会《子どもの心を受け止めるア・テイ・トレーニング》	第14分科会《養護施設を知っていますかー躬子あはうしん》
第3分科会《あそぼ あそぼ 子どもたちが遊ぶ場所》	第15分科会《子育て、教育言いたい放題》
第4分科会《子どもも市民!~ティーンズで考えるデザインWS》	第16分科会《シボカム・子どもの権利条約ができるとう変わるの?》
第5分科会《こんな学校・あったらいいよね!》	第17分科会《言いたいことを言おう! やりたいことを描こう》
第6分科会《小児科医・毛利子来さんと子育て・難産を学ぶ》	
第7分科会《語り場》	
第8分科会《シンポジウムーOK!不登校・ひきこもり》	
第9分科会《統合教育何でも相談室》	
第10分科会《大漁旗にゆめ翔けるーつくろうMy Flag》	
第11分科会《チャイルドラインー千葉からの発信ー》	
第12分科会《わたしたちはここにいて~武力紛争と子どもの権利~》	

12月8日(日) 閉会全体会 15:30~17:30 教育会館会議室 参加者150名

フォーラムの感想

?子ども・若者からのメッセージ?

武田 輝理 (16)

フォーラムに参加して、私の人権ってどんなだろうとふと考えました。

ペルーのナソップの子のひとりが、「日本の子ども達には、たくさん持っている可能性を大切に生かして欲しい。僕らの可能性は限られているから」と言っていました。それはもっぱら真実だと思いました。

でもこれを聞いた時に、今の日本の子どもらに「自分はたくさんの可能性を持っていると思いますかインタビュー」をしたくなりました。

私はそう言っている彼らの方が宇宙くらいの無限の可能性が見えたっていうか持つてると思ったし、今の日本にたくさんの可能性は見えるかと聞かれたら、私は絶対唸ってすぐには答えられないと思いました。

(自分の可能性はあるかって聞かれたら即答でイエスだけだね!!)

人権って、自分を尊重出来たり、自分で自分の生き方を選べるって事でもあると思うので、私から見てそれがうまく出来てない日本は凄く変なところだと思いました。

つまり人権が踏んづけられているのに自分で気が付かないんじゃないかと思いました。思い当たる事がある人が居たら、誰にどういう事で踏んづけられているのか、一度後ろを振り返って考えてみるとちょっと世界が広がるんじゃないかと思いました。

私は、学校に行かなくなった時に、よく世間や周りの人に「学校へ行かないのは変だ!!」とか言われましたが、「私が自分で選んだ生き方にいちやもんつけるあんたらがちょっと変よ!」と思える、それこそが自分の人権なんじゃないかと思いました。

武田 七生 (17)

今回のフォーラムで思ったことは、「子どもの人権というのは、ぜんぜん守られていないのだなあ」ということです。

自分の小さいころを思い出すと、人権侵害であふれていたんだ、ということに気づき、いま人権について考えてみても、子どもの現状はそれほどかわっていないのではないかと思います。

大人の心ない一言で傷つき、何も言えずにいる子どもに、自分の権利を、子どもの権利を知ってもらいたいと思います。私も小さい時に知りたかった、と今になって思うのです。

相手がおとなでも子どもでも、1人の人間であると認識して話をすれば、子どもが子どもであるから起きる不当な差別なんかなくなるのではないかしら。

子どもは1人の人間です。が、この当たり前前のことが、日本では無視されている気がしてなりません。人は他人の権利をうばうことなんてできない、そういう当たり前のことが、このフォーラムを通じてだったり、人との関わりの中で子どもに伝えられれば、日本という国も少しは住みやすくなるんじゃないかしら、と思う今日このごろです。

西中間 貴子 (12)

12月7日は、私にとって、とてもいい日でした。堂本県知事と会えて、話せて、写真も一緒に撮れて、とてもうれしかったです。ありがとうございました。

前北 海 (18)

某よくしゃべるおばさんはやっぱりなって印象ですね。やっぱり千葉県知事になるくらいですからね。あはは。まあよくも悪くも政治家ですね。

これからの時代は某よくしゃべるおばさんがずーっと作るわけではないので若い世代もいろいろ考えなきゃなと思った一日でした。

小林 牧人 (19)

小中学校の時『こういうことをやられた』とか『学校にくるな』と言われたことを話しました。堂本さんは「大変だね」と聞いてくれて良かったと思います。

堂本さんのとなりに座って良かったと思います。

その後みんなに褒められて良かったと思います。

知らない人と出会って、広がって友達が出来て良かったと思いました。

斉藤 千代美 (16)

私の持つフォーラムの感想は本当にみんなに出会えて良かったって事です。言いたいことの半分も言えなかったと思う、でも後悔のないように言いたいことはちゃんと言えたと思う、私の言いたいことの半分でも四分の一でも人に伝えられたら良いなと思う、最後に言いたいことだけ言って終らせたい私も感情的になっていたから訳のわからない事を言っていてと思う、だけど後悔はしてない。

だって言わずに後悔するより少しでも言ってから後悔した方が自分の中ですっきりするから、かなり失礼なことを言ったと思うしこの場かぎりだという恥じのかき捨てもあり強気にでたし、でも私が言ったことを一人でも多くの人に知ってもらえて、その一人でも私と同じ考えを持ってくればとても嬉しい。そのことを考えれば私はフォーラムで自分がとても成長出来たと思う、他では作れないような同じ悩みを持つ友達もたくさん出来た。たった一日だけとて

も大切な一日でした、冊子にも有ったように子どもの権利条約フォーラムはまだ終わってないと思う、子ども一人一人の人権を偏見なしに認められるまではまだまだ多くの時間がかかると思う、私たち一人一人の力は小さいけど何もせずにいるよりは少しは力になれると思う。だから私はこれからも少しずつでも力になりたいと思う。言いたいことの解らない文になってしまったけど、私の言いたいことをなるべくそのまま書きました。

小島 正男 (12)

フォーラムに行って楽しかったです。後、又フォーラムに行きたいです。

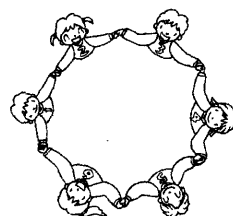
小島 正博 (13)

写真を撮ってもらったり話しをしたりもしました。楽しかったです。

小島 博正 (14)

12月8日、日曜日に「子どもの権利条約フォーラム2002 in ちば」で俺たち3人が選ばれたなんてまだ考えられない、俺たちは恩寵園（以前の虐待のことを話しました）最初は話す気満々だったけど本番になったら緊張して何をいうか迷ってしまったけど金髪のお兄さんに『話したいことが有ったらすきに話していいよ』と言われていろいろと話した。園長先生や中山健君、浦島さん、長浜先生の話を聞いてすごいと思った。

しかもヴォイスと言う人たちに『インタビューして良いですか？新聞に載せたいので、フォーラムで話したことを教えてください』と言われてびっくりした。もし新聞が出来たら俺はまだ見てないので見たいなあ。



子どもの権利条約フォーラムに参加して

山品 映二

まずはじめに、9月前半より仕事の関係で、企画を担当しつつも実行委員会にほとんど参加できなくなってしまったことを深くお詫び申し上げます。

同時に、それでもチラシの原稿を作ってくれたり、当日のことで決まったことなどを連絡してくれた下村さんに深く感謝いたします。

企画を持っていたので、自分の担当以外のところに参加することができなかったのも、私自身はフォーラムの一部しか見てないので、ひとことでは言えないのですが、やはり全体的に子どもの参加が非常に少なかったことが残念です。

実行委員会の話を聞いていてもおもったのですが、すごく「おとな」と「こども」ということを強く意識しすぎているように思いました。

もちろん、こどもが中心になることはとてもいいことです。しかし、それをあまりに意識しすぎると、それは「つくりもの」になってしまうような気がします。

「いっしょに」がやはり基本になって、そのなかでおとながどう動くか、こどもがどう動くかが大事なのではないのでしょうか。また、こどもを中心にするにはやはりあまりにも人数が少なくむづかしかった部分もあったのかもしれません。

いずれにしても、おとなからこどもまでを幅広く対象にした企画のむづかしさを感じました。もっともとおとなとこども、こどもとこども、おとなとおとなの意見交換ができるようになればいいなあと思います。





開会あいさつ



オープニング



子どもの権利条約フォーラム 2002 千葉発 Kids Rights Wave

実行委員会



展示ブースコーナー

子どもの権利条約フォーラム2002「ちば
千葉発! Kids Rights Wave
子どもと市民の参画で世界は変わる」
主催・千葉県子どもの権利条約フォーラム2002「ちば実行委員会」
会場 新館502
この先ホール内
エレベーターで
受付は消さ
れていない方は
(おれとおれおれおれ)
新館へ



子どもの表現大交流会

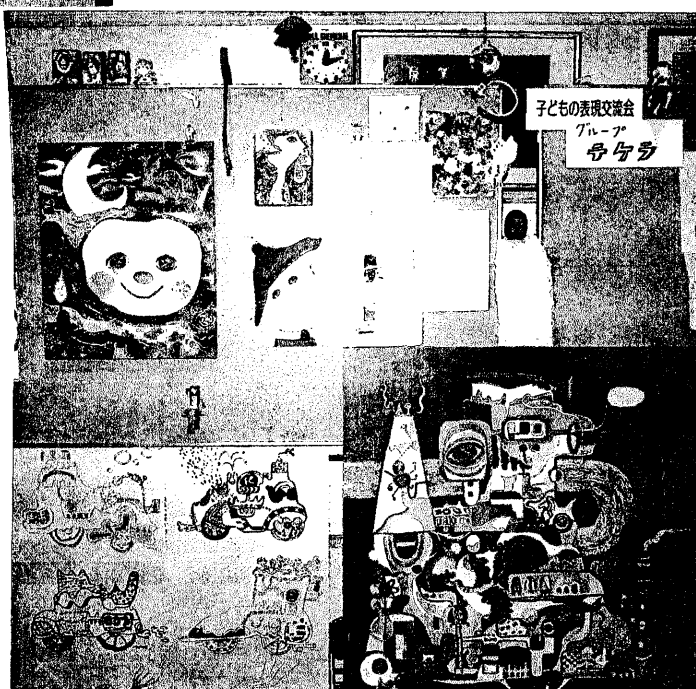
ロックソーラン



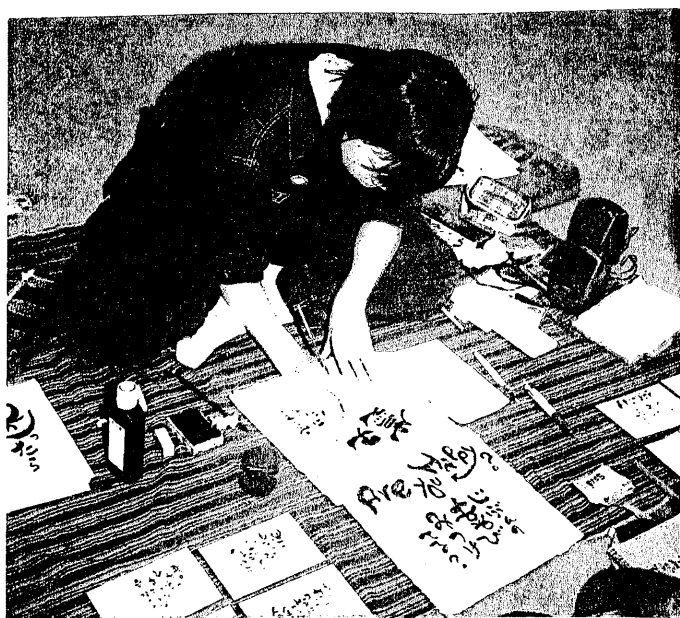
スクラッチバンド (ちばMDエコネット)



なかよしガールズ (浦安子ども劇場)



デザイン専門の仲間グループテケラの作品群



インスピレーションで言葉を書く高校生

交流会

於：プラザ菜の花

食事をしながら
交流しました



閉会全体会

子ども・若者からの発言

堂本知事と若者の対談「おとなにばかり任せていいのか!？」

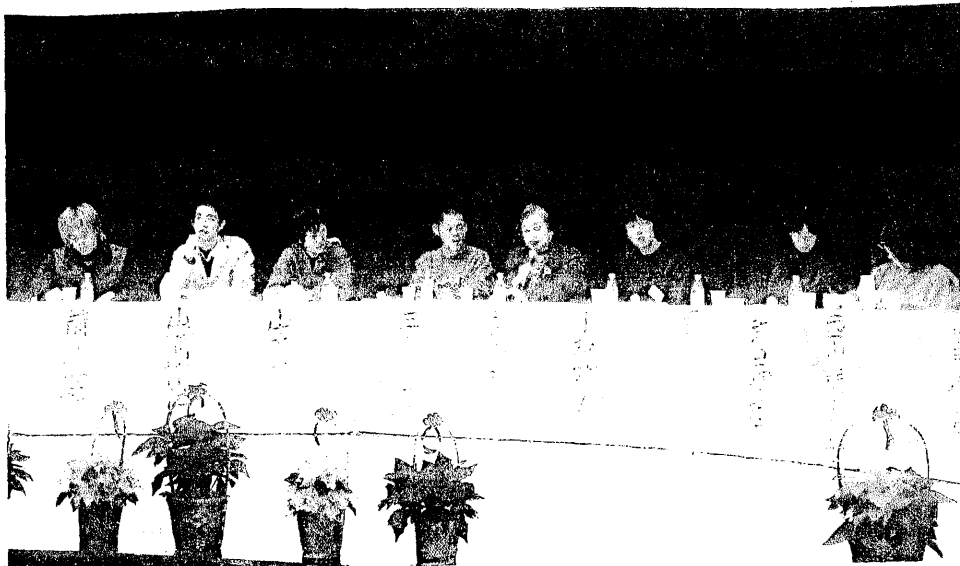
千葉県知事の堂本暁子氏と若者たちが、「学校」「人権」そして「これからのまちづくりと子どもの社会参画」等について語り合いました。

<パネリスト>

堂本暁子千葉県知事 飯塚将太 小林牧人 斉藤千代美 武田輝理

西中間貴子 前北海 三森篤志 山浦彬仁 山本智之 富坂 友

<司会> 中村桃子 松本正輝



今回の対談の経緯は、子どもたちが実際に前に出て堂本知事と対談してみたいというところがスタートだった。

さまざまな子どもたちが 10 人集まって自由に意見を言いました。時間の関係上言いたい事全部をいうことは、難しかったけれども、実際に知事と対談したという事実は、素晴らしい第一歩だろうと思います。対談の内容をまとめる事が困難だったので自分の感想を書かせてもらいます。

今回三つのテーマとして、「学校」「人権侵害」「社会参画」がありました。

全体の話で共通した部分があったように思います。知らず知らずのうちに大人たちが子どもに、こうあるべきだという子ども像を押し付けているような感じがします。そして、大人も大人像を作って自分の行動を制限しているような感じがします。社会の常識や、マナー、ルールさまざまな言い方があると思うが、こうしたある像を意識する、しないにか

かわらずに自分のルールとしてしまっている。自分の行動に制限をかけている。もちろんそれに気づき、自分のうちから出るものに従って行動している方もおられる。気づきながらも、葛藤している方もおられる。常識を打ち破って行動するという事は、意外と難しい事だと思います。もちろん常識に縛られないといっても、やってはいけない事は多々あります。それは、人をあやめる事、傷つける事。しかしこれらは、むしろ常識というよりも、人としての倫理観の問題であろうと思う。そこは、おのおのの考える事であり、人それぞれ違う部分も出てくると思います。違うという事で、常識にも差が出てきて当然ではないか。しかし、その常識は何を見て決めているかという事。

対談中子どもたちは、いろんな事を言っていた。学校に行かないでいたら、クラスメートや近所、親戚、先生から学校に行くように言われたり、行かない事で蔑視されたり。学校に行っていない子どもは果たしてだめな子どもなのであろうか？少子化が社会問題となる中でも1年間に子どもは、100万人以上も生まれている。全員学校に通うというほうは無理があるのではないか。同じシステムの中に。当人たちにとって見れば不登校はむしろいいことであるように思う。大部分の人たちは、不登校はまずいという事から始まっている。しかし、それは所詮周りの意見。どうにかしないといけないと思ひ込むからだ。それが現在の親子の苦しさを生み出している。

学校に通っている子どもからは、さまざまな校則、卒業式での規則などを話してくれた。子どもたちは、その規則に納得できていない。学校の決まりだからだと思う。生徒たちの決まりではないから。校則などは、学校という制度（組織）の上に成り立っているように感じる。しかし、根本として、髪型が決まっていたり、服装が決まっていたりと、これが守られなくなったら学校組織は崩れるのであろうか。もっといえば、校則で子どもたちを縛る事を納得させられるだろうか。疑問である。当人たちの自由だと思う。それこそ、子どもたちを見ないで、学校運営をしようとしているのではないか。学校という組織の側に立てば今のシステムは、効率はいいと思う（事実として）。しかし組織本位の規則で、子どもたちを見ないので、校則が無くなってしまうと学校システムが崩れると思うのであれば、あるいは子どもたちが成長できないと思うのであれば、子どもをあまりにも見下しているとしか言いようがない。子どもたちはいろいろと考えている。経験も少ないから失敗もあるでしょう。しかし、大人でも失敗はするものですよね。子どもと大人の比較でしかなくなる。子どもたちが自分自身で考えて行動することで失敗を経験する事もできる。自分は、失敗はいっぱいするべきだと思っています。失敗っていっぱい学ぶ事が多いですよね。決まりやルールで落とし穴を埋めてしまったら、埋める人がいなくなったときに落とし穴に落ちてしまいますよね。失敗したときに大人と一緒に考える。納得できない決まりよりも子どもたちで考え決まったルールの方が子どもたちも考える機会があるし、子どもたちは幸せだろうと思う。

ほかには、恩寵園に通っている子どもは、私学に通うには、補助金が出ない事になって

いる。義務教育を終えてしまえば、公立以外の学校に通う事は大変に難しくなってしまう。これは、だれのための規則であろうか？ 県のための規則ではなかろうか。すくなくともその子どもにとっての規則ではない事は明らかでしょう。

障害を持っている子どもには、それだけでさまざまな偏見と差別の対象となってしまう。差別をする事は、人としての倫理観に近いものがある。差別する事で障害を持った子どもと向き合えなかったら全く意味がない。果たしてそこに根拠はあるのであろうか。無意識に差別しているという場合もあると思いますが、意識しなければ、差別をやめようという気持ちになる事はないから、当事者たちにとってはもっとも厄介だろう。

それは本当に正しいのか。さまざまな決まりや、常識というものは生きていくうえで多いですね。しかし、常識の根拠は本当に正しいものであるのか。差別にしろ校則などの決まりにしろ、何のための決まりなのかという事を感じます。組織を守って人を守っていないような常識ならば私は意味を感じられない。そんな決まりは、くそ食らえでどっかにホッポリ出してしまいたい。正しいのか正しくないのか。それは、当人たちの幸福で決まるのではないか。不登校が悪い事でどうにかしなければならないという根拠はどこなのか。当人たちにとって不登校をどうにかして学校に通わせる事が幸福なのかどうか。学校に行く事でまわりは幸福になれるかもしれない。学校機関ならば学校制度を維持できる。親や親戚は、安心できる。近所の人たちは、善意のつもりで幸せなのかな。しかし、当人にとっては、学校に行く事が幸せとは限らない。常識というものさしで学校復帰を目指すなら、これほど無責任な事はない。それは、本人と向き合わないで学校に通うという組織の側に立ったものではないか。

全体を通して、社会の常識が子どもたちを圧迫し苦しめているように思いました。しかしこれは、子どもたちだけに限らず大人にも通じていると思います。社会は決まりの上に成り立っているという方も居られると思いますが、決まりがあつて人がいるのではなくて、人がいるから決まりが出来るのだと思います。人々のために。決まりやルールを作つて（法律、常識、マナー）、人間を苦しめたのでは、本末転倒だと思います。人がいてより良い生活とするためにルールを作つたはずです。

無関心にはなつて欲しくない。当人たちと向き合わないで差別や偏見、規則を作つてしまわないでください。自分はそうなりたくないです。

*当日の様子を録音してテープ起こしもしていますので、ご希望の方はご連絡ください。

文：松本正輝

私たちが求める権利とは

～ ペルーの子ども団体「ナソップ」を迎えて ～

シンポジスト： エリザベス・リベラ・アルシラさん(17歳)／ニミア・モラン・フェルナンデス(18歳)／
カルロス・アルベルト・ムチャ・ロメ君(17歳)／リサンドロ・カセレス・ゲバラ君(13歳)／
エステル・ディアス・ゴンザレスさん(大人)

司 会： 奥地圭子(NPO 法人東京シュール) 通 訳： 棚原恵子／大野智子

ペルーの子ども団体「ナソップ(MINNATSOP)」は、1996年に結成され、働く子ども達13000人がつながるネットワーク組織です。その全国代表である4人と協力者(コラボドーラ)のお話をお聞きました。出国手続のトラブルでリサンドロ君とエステルさんの到着が遅れ、シンポジウム終了15分前に成田から直行でステージに登場というハプニングが逆に会場を盛り上げました。

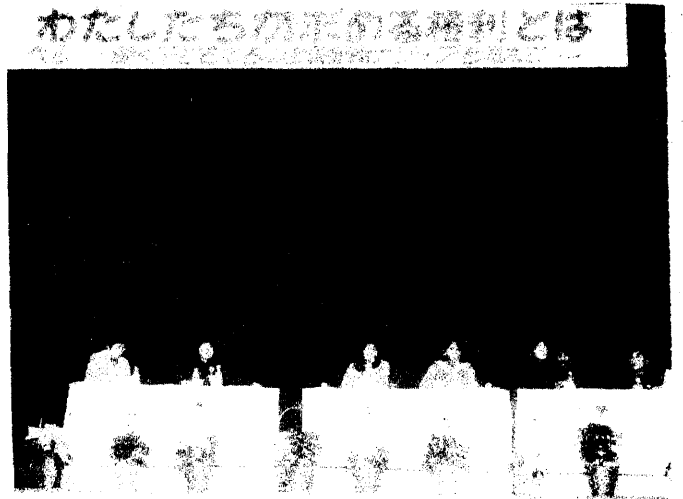
わたしたちが求める権利とは

■自己紹介とペルーの子ども達の状況

エリザベス： コンニチワ！私は10歳のときから、家計を助けるために母の家を手伝う仕事を始めました。その後、ジュースを作って売る仕事などを経て、今は市場でおもちゃを売る仕事をしています。4人兄弟の一番上で、自分の着る物や学費などを自分で働いて得てきました。ペルーの中学校は5年間ありますが、それを卒業して、現在大学へ行くための勉強中です。ナソップには、'97年に住まいのあるハエン市で全国会議が開催されたときから参加しています。次の全国会議のときに地域の代表に選ばれ、2000年には全国代表に選ばれました。働く青少年として目的を持って活動してきた経験は、私にとって大変意味あるものでした。

ニミア： トウンベスというペルーの北のエクアドルとの国境の町から来ました。両親は農業をされていて、上に4人の姉がいます。私も10歳のときからアイスクリーム売りなどをして働いてきました。現在は週末に母と一緒にタマーレスという食べ物を作って売る仕事をしています。働きながら小中学校を卒業して、今はトウンベスの国立大学でも学んでいます。私の1日は、6時に起きて朝食とシャワー、6時45分には家を出て大学へ向かいます。お昼にはいったん家へ帰り、昼食の後また大学へ行きます。夕方帰宅してから家の仕事を手伝っています。ナソップへは13歳から参加し、最初トウンベス地区代表、次に北部地域代表、そして全国代表と選ばれて活動してきました。

カルロス： 4人兄弟の一番上で、もう少しすると5



人目が生まれます。両親は農業をしており、今はそれを手伝っています。リマ市のウワチパ地区のレンガ工場(最悪の形態の児童労働の一つと言われている)で働いていた'99年にナソップのキャンプに参加し、ウワチパ地区代表に選ばれました。その後、全国会議で全国代表に選ばれました。

■大切なのは働く権利

司会： 今日の集会は子どもの権利について考える集会です。タイトルに「私たちが求める権利とは」とありますが、ペルーと日本では国情は違いますが、子どもたちから見て、自分たちの求める権利とは何だろうか、ということを見ていきたいと思います。あなた方が求める権利とは何ですか？

エリザベス： 私たちが一番大事にしていることは、働く権利です。みなさんがペルーを訪れたら、6歳の子どもでも働いているのを目にするでしょう。家計を支えるため、食べ物や着る物を得るため、学費を

つくるために働くのです。私は、朝6時から家の仕事を手伝います。日本に来て、日本の子どもたちは働いていないということを知りました。親が払う税金で学校へ行けるそうです。ですが、私たちは自分で働いたお金で学校へ行くしかありません。私たちは、働く青少年として、自分の能力と尊厳を持って働いていくことをとおして、将来のペルーを築いていきたいと思っています。そして、日本のようなすばらしい国にしていきたいです。

ナソップの活動には5つの柱があります。第一は「仕事」です。つまり働く権利ですが、それを主張することで尊厳をもって働くことが可能になると思っています。働かなければならない子どもたちがいるペルーの状況では、子どもが搾取の対象になってしまいます。だからこそ、働く権利を掲げることは重要なことです。国連やILOでは、児童労働をなくすべきだと主張しています。児童労働があるために第三世界やペルーの貧困があると説明しています。ですが、私たちはそれはまったく違うと主張します。私たちに搾取のない環境で働く権利があり、尊厳ある仕事を主張しているのです。

■組織してこそできたこと

二ミア：第二の柱は「組織化」です。自分たちが組織されていく中で、自分たちが自分たちの権利を守っていくという大きな力になっています。以前のようにバラバラになっていたのでは、子どもの権利条約を実践していくことも難しいものです。

ナソップは1996年に30の組織がネットワークして結成されましたが、その前から全国各地に小さな働く子どもの組織があり、古いものでは25年の歴史があります。30の組織は全国を6つに分けた地域ごとに組織され、合わせて13000人が参加しています。2年ごとに全国代表が選ばれ、活動をリードしていくことになっています。6地域にそれぞれ一人ずつ、コラボラドール(協力者)という大人が子どもたちによって選ばれ、ナソップの活動をサポートしています。また、ナソップの活動を推進するためにインファントという働く子ども達のための養成機関と、イフエハントという子どもたちをサポートする大人たちを養成する機関もあります。私たちは、生きていくことのクオリティを上げていく目的で取り組んでいます。

ペルー政府は、ILO条約第138条を批准し、労働を禁止する年齢を12歳から15歳まで引き上げました。私たちは以前のように12歳までとするよう声明を出し、政府も約束しましたが、約束どおりにはされませんでした。ILOは本来働く者のための機関のはずですが、働く青少年にとってはそうではなく、私たちが違法としてしまうものとなっています。今年の1月にILOはホームページで、「ラテンアメリカには働く子どもの活動がある。ペルー、ボリビア、エクアドル、パラグアイ、などの国々には働く青少年の組織があり、ILOに対して権利を主張したり声明を出したりしている。各国政府は十分に気をつけながら付き合ってほしい。決してほめられるような運動ではありません」といった内容を掲載しました。私たちはこの文章に対して、国連の子どもの権利条約委員会を通じて謝罪を求める抗議文を提出しました。謝罪はありませんでしたが、ホームページは削除されました。このような活動も、組織があるからできたことです。

■健康、レクリエーションにも取り組む

カルロス：第三の柱は「健康」です。ペルーの大統領も働く子どもを応援していると言っていますが、ほとんど何もしてくれません。私たちは安心して働くことができるように、自ら健康保険の制度を求めています。また、インファントをとおして感染症、HIVなどの予防学習にも取り組んでいます。私たちは労働者ではありますが、働いているだけではありません。一緒になって遊びながら学んでいくという考え方を持っています。それが第四の柱としている「レクリエーション」です。

■教育も活動の柱

エリザベス：最後5つ目の柱は「教育」です。組織をとおしてワークショップという形でさまざまな権利について学んでいきます。インファントからのサポートを受けながら進めていきます。インファントは日本の永山子ども基金の支援で設立されました。また、働く青少年の学校が全国に12個あります。仕事をしながら学べる学校です。

日本の子ども達のシンポジウムを聞いて、世界には異なることがいっぱいあることを感じました。ペルーでは、私たちは勉強したくてしかたありません。政

府は教育を無償と謳ってはいるのですが、実現していません。学ぼうと思ったら汗を流して働いてお金を作らなくてはならないのです。日本では、いろいろな設備が整っているなかで、学校へ行くことが苦痛である現実があるということに驚きました。

■仲間づくりは楽しみながら

司会：設備は整っているが、本当に自分たちが望む学びができていいのか、という疑問を投げかけているのだと思います。差別や納得のいかない規則、屈辱を受けるようなことがあるという話が出てきました。政府が行う学校だけではなく、いろいろな学ぶ権利を求めています。

ナソップでは、自分たちが求める権利をどうやって実現しようとしているのかをもう少し聞かせてください。13000人もの子どもたちが参加しているということですが、中には運動に無関心な子どもなどはいませんか？

カルロス：無関心な子どもたちもいます。彼らを引きつけるためにレクリエーションやキャンプをします。例えば夏のキャンプは各地でやっていて、楽しみながら私たちがどういう活動をしているのかを伝えていきます。’99年には国内オリンピックを開催し、サッカー、バレーボールなどスポーツを楽しみながら働きかけをしました。

■自分自身が変わった！

司会：ナソップに入って、みなさんが変わったことはどんなことでしょうか。そして、日本の子どもたちに言いたいことは？

エリザベス：私は自分の意識がすごく変わりました。ディベートするトレーニングがされ、さまざまな提案もできるようになりました。学校へ行っても、先生に対しておかしいことはおかしいと言えるようになりました。自分がイニシアティブと積極性を持つようになりました。日本のみなさんには、状況は違っても、共に尊厳ある仕事、搾取のない仕事の実現するように連帯していけたらと思います。

ニミア：日本のみなさんにも働く権利をサポートして欲しいです。

カルロス：以前は仕事を転々と替えていました。なかなかお金を支払ってもらえないような搾取され

た仕事もありました。ナソップに入って、ちゃんとお金もらえるような仕事を得たり、家族を支援することもできるようになりました。ペルーと日本では天と地ほどの違いがありますが、みなさんの持っているものを大切に可能性を100%、200%伸ばしてください。

■プロタゴニズムを推進しよう

リサンドロ：こんにちは。いろいろな壁を乗り越えて、ここ日本までやって来れました。13歳でナソップの全国代表です。子どもの権利条約は私たちの権利を保障してくれる道具だと理解しています。ペルーでは行政、官僚などさまざまな権力者は、私たちの声をまったく聞いてくれません。ですから、こういう条約で権利主張をしていこうとしています。今、いろいろな国が貧困化しています。そのなかで、プロタゴニズム(主役主義)を推進していくことはとても大切なことです。プロタゴニズムとは、人は生まれたときから人格があり、社会参加して自分たちが何をどのようにしていきたいのかを主張する権利があるということです。貧困をなくし、子どもの社会参加を進めようということでは、みなさんと、おそらく心は一つだと思います。私たちの活動には26年前からのムーブメントがありますが、そのムーブメントとみなさんのおかげで、遅れても、ここへたどり着けたのだと信じています。

エステル：こんにちは。ナソップの大きな成果の一つは教育です。私たちコラボラドーラの役割は、働く子どもたちだけでなく、すべての子どもたちに、自分たちで自分たちが社会を変えていくプロセスに参加していく主役であるというプロタゴニズムを提示し推進することです。自分たちの権利をどう守っていくかということは、飢えている、いないなどには関係ないことです。一人の人格として社会参加していく権利においては、貧困国であるかないかに関わらず、子どもたちは見下された存在です。ナソップでは、私たちは平等で人間的な新しい社会をつくっていく主役なのだ、また、そのような力があるのだ、という教育をしています。そういった点で、私たちは国境を越えた兄弟だと思います。

〔文責：中村国生(東京シューレ)〕

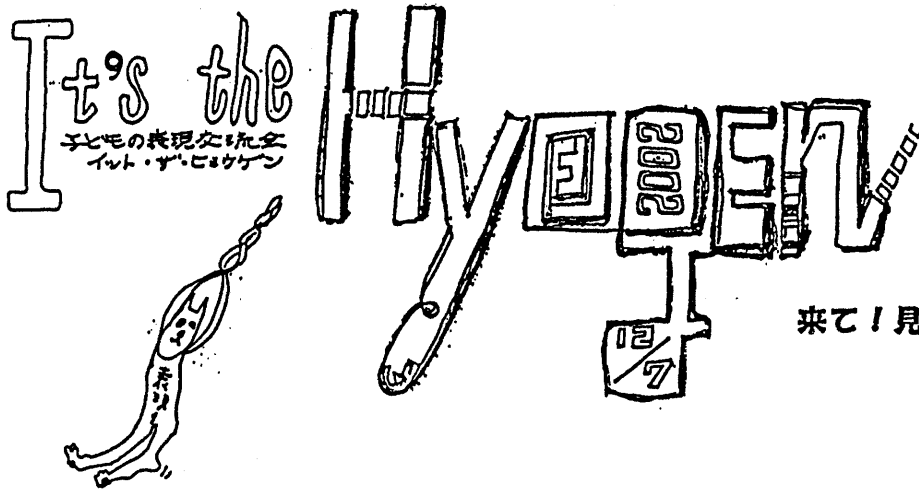
子どもの表現大交流会

大ホールにて 17:00～19:00

子どもの権利条約フォーラム2002 INちば



責任者 平田美貴



来て！見て！触って！ぼくらの表現

毎年、子どもたちが自由に自己表現する場を設定している事をうけて、NPO法人・子ども劇場千葉県センターが企画を担当。様々な表現活動をしている子どもや若者が集まり発表を目的とした子どもの表現大交流会を開催した。〈映像部門1グループ・アート部門3グループ・音楽部門9グループ〉

目的

- ▶子どもの権利条約を子どもたちが自己表現する事で更に広げ進めていく
- ▶子どもと大人の境目をなくし子どもの権利条約の想いをつないでいく交流会にする
- ▶子どもたち自身が仲間を呼んで参加できる場にする

日程・打合せ会議

第1回	8/17(土)	船橋市中央公民館	※交流会の目的、イメージづくり
第2回	9/22(日)	船橋コミュニティカフェ“ひなたぼっこ”にて	※出演参加の呼びかけ
第3回	10/13(日)	船橋コミュニティカフェ“ひなたぼっこ”にて	※出演参加グループの確認、ちらし作製と配布先の確認
ソーラン隊打合せ	10/29(火)	船橋市塚田公民館	
第4回	11/8(金)	船橋市西部公民館	※進行表確認と係決め
第5回	11/19(火)	ソーラン隊 柏市豊四季台近隣センター バンドメンバー 船橋市内にて	
ホール打合せ	11/25(月)	教育会館	
司会打合せ	11/29(金)	船橋市内にて	



実行委員及びスタッフ 下村くん 小林くん 渡辺くん 佐々木くん 菅野くん 勝又さん 安藤さん
川本さん 荻原さん 朝倉さん 金城さん 椎名さん

プログラムの内容と団体名

< 作品展示 ロビー&ホワイエ >

五十嵐亮輔くん (こどもユニットWakaba 高3)

Tシャツに描いた物など力強さを感じるイラスト作品集。

グループテケラ (クマサカモモエさん 河井彩佳さん 平田睦さん)

高校時代のデザイン専門の仲間たち。

イラスト・絵画・立体作品・写真等、色とりどりの作品群に関心が集まり、子どもたちとの会話がはずむ。

路上詩人 小川まゆさん (静岡市在住 高3)

授業を終えて駆けつけてくれた。出会った人との

インスピレーションで言葉を書く。書いてもらったものを見て、ぴったり！と感動の人・人。人だかりはエンドレスでした。

＜ 舞台発表 出演順 ＞

司会

渡辺周一くん、小林牧人くん

看板

NPO法人市原市こどもセンターの小学生 作製

①ダンスグループ

NPO法人東京シュレー 9名

②なかよしガールズ (合奏)

浦安子ども劇場 小学生5名

③ビデオ映画

石本恵美さん NPO法人シュレー大学

④スクラッチバンド

NPO法人ちばMDエコネット 高校生+若者4名

⑤ボーイジャー

NPO法人緑区子どもサポートセンター 中学生4名

⑥横浜学生バンド

横浜市在住 高校生+若者4名

⑦もみあげファンタジー

NPO法人千葉中央おやこ劇場 若者4名

⑧クラスメイト

柏ストリートミュージシャン 若者2名

⑨ピアノ・ソロ

山浦彬仁くん 高1

⑩ロックソーラン 約50名

柏子ども劇場ソーラン隊

NPO法人四街道こどもネットワークソーラン隊

NPO法人NPO佐倉こどもステーション北海組合

始めは、キリッとしたお化粧と揃いの衣装で登場したダンスグループ。ホタルをイメージした光が最後にひとつになる印象的な舞台だった。楽屋では不安そうにしていた小学生グループが、出番となると堂々の演奏。惜しめない拍手に皆、とてもいい顔になっていた。アンコールがほしかった。次に記念すべき第一作目という短編映画「温色」は、効果音のみで、言葉がない分観る側の心に直接訴えるものだった。

表現する醍醐味はこれから…期待がふくらむ、ジャンルは音楽へと。ピアノのソロはゆったりと詩のように語りかけ、バンド演奏は“響け”とばかりに力が漲っていた。拘りの楽器、拘りの音創りを大いに発揮、そして拘りの仲間たちと共に会場を巻き込んでいく。最後はロックソーラン。オープニングのメンバーも加わり清々しく踊る。ホール全体にソーランの波が広がり、熱い2時間が終了した。

取り組みとして

- ◆2時間の制約の中、様々なジャンルの発表が出来た。又、様々な子どもたち、若者たちの生き生きとした姿が見えフォーラムを盛り上げるイベントとしての成功を担えた。
- ◆打合せ会議が重要な交流の場になった。スタッフだけでなく出演するメンバーも一緒に出席する事で、フォーラムの目的を話し合い、イメージを深め合うことが出来た。
- ◆機材を十分に準備出来なかったことで辞退したグループが出てしまった事は残念だった。
- ◆予算のない中、ホール側の担当の方にも協力を頂き設備を最小限度に留め、必要な物は出演者同士が補いあった。しかし、音調整は不十分で歌が聞きづらくバランスの悪さが目立った。
- ◆この交流会に出演した子どもたち、若者たちが他の若者たちとも出会う交流の場が必要だった。

子どもたちが自己表現している姿を見ると元気が出ます。表現大交流会の目的はフォーラム開催を受身にしない、自らやりたい事で参加する事にありました。その参加の意志は『創り上げる』という意志であり、仲間と対話し、何日も、何回も練習を重ねて準備してきました。発表だけに留まらず心に残る感動を生んだのは、こうしたプロセスを子どもも大人も共有し、認め合う繋がりが出来たことを意味します。子どもたちがやりたい事を発信し、“思う存分”の表現の世界が広がってこそ、子どもの権利条約の進展があると確信します。